令和５年度第１回下田市総合教育会議　会議録

開催日時：　令和５年８月 24 日（木）15 時 30 分～17 時 10 分
場　所　：　下田市立中央公民館　大会議室

出席者　：

【委員】

市長	松木　正一郎	教育長	山田　貞己
教育委員	田中　とし子	教育委員	西川　紀栄
教育委員	宮内　慎也		

【事務局】

学校教育課

課長	佐々木　雅昭	参事	土屋　大祐
学校教育係長	齋藤　祐樹	こども育成係長	増田　義和

生涯学習課

課長	平川　博巳	課長補佐	鈴木　美鈴
図書係長	朝比奈　誠	社会教育係長	中堀　啓司

企画課

課長	鈴木　浩之	政策推進係兼企画調整係長	金守　俊彦
主事	竹見　裕野		

傍聴者　：　報道関係４名

１　開会　15：30

２　あいさつ

・市長

本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今年度１回目の総合教育会議になるので、まずは今行っている色々なことを報告し、その後グローカル教育の在り方について皆さんの意見を頂戴したいと思う。よろしくお願いします。

・教育長

猛暑、酷暑が続いているが、来週月曜日は始業式で２学期が始まる。コロナが出始めたと聞く。まだ子どもたちの状況はわからないが必要に応じて報告していく。２学期スタートということで良い教育活動ができればと願っている。グローカル CITY プロジェクトについては、今までやってきたことではあるが、新たなことも加わりつつあるので色々なご意見を頂ければと思う。

３　報告事項

(1)市内小中学校の状況（１学期の振り返り、いじめ等の状況）について

・事務局（学校教育課参事）より資料１、資料２に基づき説明。

【質疑、意見等】

・教育長

いじめの認知件数に対して解消件数が少ないという印象を受けるかもしれない。それぞれの事案について丁寧に指導しているため、全ての件数が解消されないのが現状である。

・田中委員
不登校の児童生徒数が小・中学校併せて 13 名いる。何かのきっかけで登校できるようになると説明があったが、差し支えなければどういう状況だったか教えていただきたい。

・学校教育課参事
小学校で長期間登校できなかった子どもが、中学校が統合し環境がリセットされ、色々な友達と関わりができたり、部活動で活躍できたことがきっかけで登校できるようになったという事例がある。また、適応教室に通い指導を受けている子どももいる。子どもによって長期で不登校になると色々手を加えてあげる必要がある。

・田中委員
学校に出てくることが一番良いのだが、それが最適だとは思わない。子どもによって色々な学習の機会があるので、子どもたちが学習できれば良いのでは。長期間登校できない子がいるのであれば何かしらの手助けが必要なのではないかと思う。なかなか解決までいかないが、そういう状況になれば良いと思う。

・宮内委員
いじめの認知件数とあるが、いじめといたずらの判断がつきにくい場合がある。どのように認知しているのか。また、担任の先生の負担とあるが、担任の先生に一番しわ寄せが行っているのか。

・学校教育課参事
いじめ防止法により、相手が嫌だと感じるといじめになるとなっている。学校では２つの方法で認知している。１つ目は定期的に本人にアンケートを実施。２つ目は先生や友達からの情報提供による。小さなことでもなるべく多くの声を拾い、深刻な状況にならないようにしている。
各校にいじめに関する委員会をもっており、窓口担当、生徒指導担当、担任、教頭、養護教諭で対応しており、担任１人が抱え込まないような体制になっている。

・西川委員
見守り継続とあるが、１件１件に対応しているのか。

・学校教育課参事
いじめを認知したら必ずアプローチすることになっている。簡単に握手したら仲直りで終わりということではなく、相当の期間は教育委員会と学校でしばらく後の様子を見守っている。

・企画課長
タブレットの活用が進んだとあるが、状況を教えていただきたい。

・学校教育課参事
各学校で上手に有効的に使用している。課題としては、家に持ち帰ってより自由に活用できたらと考えているが、セキュリティの問題や生徒指導上の問題等を含めて、上手く制

御していきながら今よりもっと使えるように進めている。

・田中委員

今は考え方が変わり、絶対に学校に行かないといけないというわけでもないと思う。例えば、ある不登校の子どもがいて近況を聞くと、祖父と船に出るという。生きる活力については学んでいる。学校での学習はしていないが、生きるということに対しては、一生懸命勉強していると思う。絶対に学校に行かなければならないということではなく、子どもたちが学習できる場があれば、学習をしていると教育委員会で認識することはできないだろうか。このような判断は今どうなっているのか。

・学校教育課参事

子どもによって体験や充実性というのは変わってくるので、価値があることだとは思う。現在の教育課程の中で、授業に参加したものと認定するのは難しい。意図的・計画的にやっているという評価に関わってくる。ただし共通することは、出席はしていないが、今、子どもがどのように生活しているか把握するようつながりを持ち、ICT の活用も含めてサポートするようにしている。

・市長

私たちは教育を供給する側として、子どもにとって学校に来ることが必ず幸せ、ふさわしいと言えないことがあるという意見に心が洗われた。深いことだがこういう場でしっかり議論していくことが大切だと感じた。

(2)コミュニティスクールについて

・事務局（学校教育課学校教育係長）より資料３に基づき説明。

【質疑、意見等】

・田中委員

コミュニティスクールの目指す方向はどこか。そこに人がいて今後どういう生き方をしていくかが大切。コミュニティスクールの狙いは人口減少と高齢化。統合すると今まであった地域が衰退する。コミュニティスクールはそういう狙いがあって地域と子どもたちを育てていくという考えでよろしいか。

・学校教育課学校教育係長

学校評議員制度については、学校長の意見について意見を述べる学校の補助機関で行っていた部分がある。コミュニティスクールは、開かれた学校ということで PTA の活動は今までもあるが、学校経営方針について様々な意見を出すことができる協議会になってる。学校長が代わっても地域の特色を学校をに色濃く残していこうという目的で行っていくような趣旨。

・学校教育課参事

学校も地域も元気になるということを考えている。これまで個人的なつながりで依頼することはあった。人が変わっても地域とのつながりを広く活かしていきたい。下田中学校が統合したことによって、地域ごとの活動をどうしていくかが課題となっている。それぞれの魅力的な活動があり、それぞれ持っている資源を活かしていくという意味で、この仕組みが機能していくのだと思う。

・田中委員

子どもたちがふるさとについて、思い出や愛情、また、このような状況でここに住みたくないという現実を抱くこともあるかもしれない。そういう時に、地域の方々や学校、総合的な学習等を活用し地域が活性化していくために、このような制度を使っていければ良いと思う。

・教育長

コミュニティスクールは、阪神淡路大震災後に、地域と協力して学校づくりをしようとしてできたもの。学校評議員制度というのは、それぞれの学校への要望は言うが、それ以上はない。コミュニティスクールはより学校に踏み込んで、地域ぐるみで一緒になってやっていくもの。教職員の任用に関して意見を言っても良いのではというのがこの仕組み。また、教員の働き方改革ということで、学校だけではできないこと、地域と一緒にやっていこうというもの。一方で事業者との連絡等があり　３分の１の小学校では教職員の負担減にはなっていないという声を聞く。中学校は割と前向きにやってもらっていてありがたく感じている。

・企画課長

現在企画課では、高校とのつながりを模索している中で、高校も地域とつながりたいという要望が強く、総合探究の時間に職員や地域の方々を派遣したり、昨年からトークフォークダンスを実施している。小・中学校のつながりを高校に上手くつなげていけないかと考えている。また動きがあれば報告していく。

・教育長

人事異動があっても大丈夫というコミュニティスクールでありたい。それが本来のコミュニティスクールの姿だと思う。来年度は小学校全７校でも実施する予定。

・田中委員

先生方の負担も考えないといけない。地域の方々の協力がないと続かないと思う。

・教育長

今、教職員の負担が大きため採用試験の倍率も低く、なり手が足りないと盛んに言われている。学校の先生は大変だと理解されているように感じる。

(3)東京オリンピック・パラリンピックホストタウン交流事業について

・事務局（生涯学習課長）より資料４に基づき説明。

【質疑、意見等】

・市長

ムーア・アロハ財団のプログラムはサーフィンだけか。昨年のカリッサ・ムーア選手との交流では、自然を再認識する、生き方に踏み込むといった哲学的なものという印象があった。サーフィンをやっている子は１つのきっかけとなり、やっていない子どものにも自然について学び生き方を学ぶということを、子どもたちは純粋に受け取っていたのが印象的だった。このようなプログラムは必ずしもサーフィンだけではなく、サーフィン部だけがハワイに行けるのかという声もあったが、そうではないと仕立てを変える時にどのようにして自然と人間の向き合い方のようなものを入れ込むのか。そのことについてもう少し説明をお願いしたい。

・生涯学習課長

ハワイに行ってアロハスピリットを学ぶことは、サーフィン部だけではなく中学生全員を対象とした。オリパラ推進協議会の中でジャパンスピリットではないかという話も出てきている。大野選手を中心に酒井理事長や関係者から、ハワイに行って子どもたちが経験するのではなくで下田から発信していこうという前向きな意見を頂いた。行けば良いというのではなく、新しい仕組みを作ったり、情報発信できるような子どもたちの交流事業をこちらからやっていけるようにした方が良いという話があった。その前段で、サーフタウン構想を作り色々研究していこうという状況です。具体的に何をどのようにしていくかはまだ進んでいない。行く予算があったが、推進協議会の方で下田で迎え入れる方の事業の中で今年度補完する。ただし、サーフィンは核になる部分なので、サーフィンについてもしっかりやっていこうと今動いている。

・市長

最後のページの工程表のその他でアロハシャワーの記載があるが、このアロハは先ほどのアロハスピリットにつながるもの。このアロハシャワーというイベントを上手く取り込み、アロハシャワーの一環にした事業にしても良いのではないかと思う。ジャパンスピリットも類似しているのであれば、子どもたちに発表してもらっても良いのでは。相乗効果があると良い。

・生涯学習課長

来週サーフタウンの関係でワークショップを開いて色々な意見を聞く。まどが浜文化イベントの委員の方に相談しながら具体的に何かできるか進めていければと思う。

・企画課長

ホストタウン交流事業については、今年度事業これから情報共有しながら進めていくのでよろしくお願いします。

(4)ニューポート市訪問について

・事務局（企画課長）より資料５に基づき説明。

【質疑、意見等】

・市長

新型コロナウイルス感染症が５類に移行後、社会の様子を見ながらの判断で、スケジュールが決まるのは直前だった。視察団の構成は、中学生４名、下田ニューポートクラブの会長副会長夫妻、事務局、市長夫人という構成だった。今後も活発な交流を続けていこうと再確認した。ニューポートクラブにおいては、市民レベルでの草の根の交流ということで、３年間のブランクを埋めることができたと感じている。向こうの方々も大歓迎だった。CCNY（ニューヨーク市立大学）からは下田の人たちが来たと歓迎を受けた。また、ハリスが創った大学ということでCCNYの図書館の入口には下田の図書があり、常設だと聞いた。成果としては、ニューポート市では、ペリーの子孫、ニューヨークではハリスの子孫の方に来年の黒船祭に誘うと、ぜひという返事をいただいた。来年、目玉になるだろう。私たちは、ペリーやハリスの様々な交流のきっかけを作ってくれた方々の恩恵によって成り立っているとしたら、グローカルCITYにとってすごく重要な意味を持つ。来年はもっと盛り上がるだろう。ニューポート市長夫妻も来てくれるという返事をいただいた。大勢で来てくれることを楽しみにしている。

・田中委員

６泊８日で子どもたちの活躍や進歩は見られたか。

・企画課長

ホームステイがあればもう少し打ち解けた交流があったかもしれないが、集団行動の中で、なかなか個人同士がコミュニケーションを取るところまではいかなかった。ただ、緊張も見られたが、日を追うごとに子どもたちも一生懸命英語で話そうという姿勢が見られた。

・学校教育課参事

子どもたちを出迎えた時に、たくましくなったと感じた。色々な所に行って色々なことを見たり色々な人とつながるということは、子どもたちとって大きな成果だったと感じでいる。

・田中委員

今までやってきた英語学習を活かせたのか。

・市長

資料の写真について、ニューポート市長と生徒が話している写真がある。子どもたちに１人ずつ質問してみるよう言った。質問は自分で考えるが、隣で領事が通訳してくれるので日本語で良い。もう１つ、CCNY で現地の方と食事をした時の写真については、通訳なしでいくしかない場面だった。そのようなことが、先ほどの参事が言うたくましさなのだと思う。

・教育長

子どもたちの親からはとても良かったという感想を聞いた。スケジュールが過密だったことや待ち時間が多かったとは言っていたが、子どもは本当に喜んで充実して帰ってきたと感謝の言葉をいただいた。来年は今回のスケジュールにホームステイが入ると５泊くらいホームステイになるのか。

・企画課長

いくつかポイントになる行事については、ホームステイ先の方に送ってもらうことになる。また、学校で子どもたちの発表が予定されているようだ。広報でも感想文を掲載する予定なのでご覧ください。

４　議事

グローカル CITY プロジェクトについて

・事務局（企画課長）より資料６に基づき説明。

上智大学との連携協定締結について報告。地域のフィールドとして下田市に海に関する上智大学の研究所があり、その縁で下田市と協定締結に至った。上智大学は世界 90 カ国から学生が集まり、東京のキャンパスだけではなく日本中さまざまな場所で学習・研究・調査活動等を進めている。その１つの場所として下田市と連携することになった。市としては、グローカル CITY プロジェクトの一環として多くの国の方々に来ていただき、小学校、中学校、高校、市民の方々を含めて様々な交流活動をやっていければと考えている。もう１つは、下田市がローカルという部分で下田の財産である海、自然環境の保全・活用の部分について、

上智大学の研究者、研究機関とつながりを作っていきたいという２面の事業を持ち、協定を結んだ。具体的な事業については様々な形で相談しながら進めていく。本日は、グローカル、国際化、国際交流、教育機関との連携等について意見交換ができればと考えている。

【質疑、意見等】

・市長

昨日、県内の金融機関とその子会社が来庁し、マーケティング、市場のニーズの的確な把握により利益が上がると考え会社を立ち上げたという話を聞いた。ある企業出身の社員の方がいて今までのノウハウを活かして色々やっていきたいということだった。上智大学も同様で、少子高齢化に苦しんでいる地方の自治体に対して、プランの提案や実際にアクションを起こすことで社会貢献しているとしたい。今までのようにただお金を出すというのではなく、どんどん提案していくフィールドを探している。このフィールドとして下田は、彼らにとって自然や歴史がありとても魅力的である。探していたフィールドの下田市と、探している企業や学校とが上手く組むことでグローカル CITY を達成できると考えている。このグローカルの中の教育については、地域のことも知り地域に根ざしながら国際的な視野を持つ子どもを育てる、としている。

本日の記者会見で、ハワイのマウイ島大火災への寄付をやらないのかという質問があった。当市はグローカル CITY を謳っており、外国で起きていることにも関心を持たないといけない。それはハワイだけでなく、ウクライナや中国の少数民族のこと等、想像力を持って自分自身で考えるようにしたいと思っている。寄付をしようというのは、アクションだが、その手前の想像力というのも大事だと思うと、記者会見で述べた。特に教育分野において、子どもたちに、同じ人間として他国では何をしているのかを分かってもらうことは大事だと思う。

・教育長

協定書締結式に同席したが、学長とあんさんの話を聞く中で驚いたのが、上智大学のイメージはやはりグローバルで、下田市の学生とどうつながるかイメージすると、どうしてもグローバルのイメージが強いと思っていた。しかし、学長とあんさんはローカルの部分を大事にしないといけないと話していた。今回は子どもたちも下田の環境を考える機会だと思っている。現在、市からの補助金で、小・中学校の自然体験プログラムを行っているが、それを土台として活動を広げられると感じた。決して外に目を向けるだけが学習ではなく、まずは足元を見て、地に足を着けて行うことが大切だと感じた。

・宮内委員

グローカル CITY プロジェクトについて、主体となるのが中学生世代かと思っている。以前中学校の PTA 会長をしていたときに、高校を卒業した後、下田を出たい子どもは半数以上いた。私は自然豊かな良いまちだと思うが、中には他を求めて出ていく子どもがいる。子どもたちをどう食い止めるのか、議論する場をもち、何を求めているか、何があればここに戻ってくるかという話合いを設けて下田をもっと活性化していくべきだと思う。些細なことかもしれないが１つ１つできることからやっていけば、子どもたちが高校、大学を卒業してここへ帰って来ようとなるのではないか。

ネパール、台湾、中国など、グローバルに色々な人がいて、食文化も異なるので、日本食に慣れない人は、カレー屋や中華料理屋に行きおいしかったという声を聞く。色々過ごしていると相手の文化を知れて良かったと感じる。自分が経験したことを子どもたちにも共有して、いつか下田も日本人だけでなく海外の人々も迎え良い市にしていければと思う。

ぜひ国際的な市にしてもらいたい。
　また、黒船祭で色々な人たちを見てすごく驚く方がたくさんいる。下田に来てから黒船祭を知ったという人もいる。ぜひもっとPRしてほしい。

・西川委員
　子どもが高校１年生で進路を決めないといけないが、下田には大学がなく、専門学校は看護学校が１つ、近くでは稲取のアニマルキーパーズカレッジと、道が限られていると感じる。大学や金融機関の方々が違う風を起こしてくれると、この先の子どもたちが下田にいても色々なことができる、社会人になっても残って色々やれることになり、それが理想的だと感じる。大学進学で下田を出ると帰ってくるのかと思う。できれば下田に残って下田を活性化してほしいと自分の子どもには望んでいる。このような取組みをとても楽しみにしている。

・市長
　教育の魅力化というのがある。黒船祭を含め自分のまちのことをきちんと知っていて、例えば、今度の〇〇は下田出身となると良い。そのため全員が下田に戻ってこなくても良いと思っている。仕事については、デジタルの発展により20～30年後には違う社会になっていくと思う。それにより土地の不利は解消されると思うが、それまではやはり不利な地域であり、職の選択肢が思い浮かばない。都会は色々な職種、大学生が見られるが下田では見られない。今はいろんな情報を得ることができるが、もっとリアルな形で大学生や外国人と直接触れ合える機会を持つことで、それが教育を魅力化し、皆でお互いに議論したりできるまちにしていきたい。子どもの頃から異種なるものを目の当たりするようなグローカルの拠点、また地域の情報発信の拠点にもなるものを庁舎跡地に作りたいと考えている。あと３年くらいでできるよう考えている。それまでにこのグローカルCITYプロジェクトの中で色々トライアンドエラーでやってみて、何が必要なのか、ニューポート市のように相手とつながれる所を作り、どんどん広げていければと思う。これによって子どもたちの選択肢も広がると思っている。

・企画課長
　新しい委員さんもいるので、またグローカルCITYプロジェクトについて市の説明の機会を作りたいと思う。引き続きよろしくお願いします。

・宮内委員
　上智大学の学生さんに小学校等に行ってもらえればと思う。

・西川委員
　国際色豊かになりそうな話が聞けて良かった。今はないような仕事がこれからできてくるというニュースを目にする。自分たちで作り情報発信していくことで、より良い下田市にしていけると思う。

・教育長
　色々な取組みを子どもたちができると良い。自分の生き方、将来を考える時に過去の体験が活きてくる。下田から出ても良い。自分らしくどんな生き方ができるか、それができれば学校としては十分かと思う。体験したことが刺激となり、色々な選択肢がたくさん出てくるような支援をしていきたい。

４　その他

５　閉会　17：10